

## 教育学部学生の学習生活についての調査研究 (第2報)

岡 本 洋 三

Research on the student life in the Faculty of Education,  
Kagoshima University (II)

Hiromi OKAMOTO

### 1 調査の目的と調査方法について

今日の大学生の大学生活について主として学習生活の面の実態を明らかにすること、彼らの学習生活上の問題点を彼らのそれまでの生活のありかたとかかわらせてとらえることが、この調査研究の課題である。この問題意識から、筆者は1982年9月に鹿児島大学教育学部学生を対象に「教育学部学生の学習生活の調査」を実施し、その結果については、本報告と同題で「第1報」として先に報告した。今回はこの1982年調査のなかで明らかになった問題点を考慮して調査方法上の修正をし、1983年7月に実施したものである。前回調査との異同は主に次の諸点である。前回調査は予備調査的な意味があり、標本数をかなりおさえた(199)。そのため、当初の調査計画の主要なポイントであった「留年生(卒業延期生)」の学習生活上の特徴の析出が十分にできなかった。(留年生の標本が12と少なかった)。また、サンプリングの方法に問題があり、標本が小学校教員養成課程(以下「小学」と略す)の学生にかたより、教育学部学生の全体的な特徴がつかめなかった。作成した質問文は調査結果の分析からみて必ずしも有効でないものもあった。これらの点を考慮して、基本的な調査の枠組は前回と同じであるが、質問の構成や選択肢の設定を修正し、サンプリングにおいて「留年生」については別個に悉皆調査(実際には回答しない者が多く、48%の歩留り)的な取り扱いをし、また学部学生の全体をとらえるように工夫した。質問紙の内容は次の通りである。

第1表 教育学部学生調査

◎ 該当する回答番号に ○印をつけてください。

- 1 あなたの性別は 1) 男 2) 女
- 2 あなたの所属する課程は 1) 小学 2) 中学 3) 養護 4) 高体
- 3 あなたの所属する専攻・選修は 1) (教育・心理・障害児教育) 2) (国語・英語・社会)  
3) (理科・技術・数学) 4) (家政) 5) (美術・音楽・体育)
- 4 あなたの入学年は、昭和 1) 57年 2) 56年 3) 55年 4) 54年 5) 53年～以前
- 5 あなたの大学入学は 1) 現役 2) 1年浪人 3) 2浪～以上
- 6 あなたの教養課程在籍期間は 1) 1年半 2) 2年 3) 2年半～以上
- 7 あなたの家庭の職業は 1) 農・林・水産業 2) 商・工業自営 3) 教員 4) 教員以外の公務員(公社員も含む) 5) 会社員等一般勤労者 6) その他
- 8 あなたの高校時代の生活について、当時のあなたの気持に一番近いのは 1) 充実, 満足 2) とくに不満はない 3) とくにないとも考えたことがない, なんともいえない 4) いろいろ不満があっ

- た 5) はやく高校を卒業してしまいたいと思うことが多かった
- 9 あなたは高校時代、学校の勉強や受験勉強以外で、とくに「熱中」したものがありましたか 1) あった 2) なかった
- 10 あなたが「熱中」したものを次の中から1つ選んでください。1) 文芸(読書・創作) 2) 芸術(音楽・絵画などの鑑賞・制作等) 3) 映画・演劇(鑑賞や制作等) 4) 研究(学習・実験・調査等) 5) スポーツ(登山・旅行なども含む) 6) 社会活動(福祉・奉仕活動も含む) 7) 生徒会活動 8) 交友(恋愛も含む) 9) 他
- 11 あなたの高校時代、あなたに影響を与えた先生、あなたが信頼した、好きだった先生はいましたか 1) いた 2) いなかった
- 12 あなたはその先生のどんな点にもっとも魅力を感じたのですか。次の中から1つだけ選んでください。1) 学識の深さ 2) 授業が面白い 3) 指導の熱意 4) 誠実さに 5) 生徒とよくつきあう 6) 生徒の気持をよく理解 7) 生徒のことを心から思ってくれる 8) あなたかみのある人柄に 9) なんでも話せる信頼感に
- 13 あなたの高校時代、「親友」とよべるような友だちがいましたか 1) いた 2) いなかった
- 14 あなたが鹿児島大学教育学部を受験した理由(選択条件)を次のなかから2つ選んでください。1) 鹿児島大学に入りたかったから 2) 教育学部に入りたかったから 3) 地理的条件から 4) 学校(教師)の進路指導で 5) 親の希望で 6) とくに希望していたわけではない 7) 他
- 15 あなたが入学当時、大学での生活において期待していたことを次のなかから2つ選んでください。1) 大学の講義 2) サークル活動 3) 交友 4) 自由な時間 5) 親から自由になる 6) 自分の趣味を深める 7) 他
- 16 あなたの教養時代の学生生活は充実していましたか 1) 充実していた 2) なんとなくすぎてしまったが、とくに不満はない 3) むなしい感じ
- 17 あなたが充実感を感じたのはどのような面でしたか。前問の回答にこだわらず、該当するものにいくつでも○印をつけてください。1) 学問的な面(講義や自分の学習) 2) サークル活動 3) 交友 4) 社会的活動(ボランティアも含む) 5) 趣味的活動 6) アルバイト 7) 他
- 18 あなたは教養課程の講義にどのくらい出席していましたか(全体的に) 1) よく出席した 2) 科目にもよるが、比較的よい方だろう 3) 普通だと思う 4) 自分の関心のある科目以外はあまり出席しなかった 5) 全体としてあまり出席しなかった
- 19 教養課程の講義のなかで、あなたに強い影響を与えたものがありましたか。(たとえば、学問にたいする興味や関心を触発した、自分のもののみかたや考えかたを変えた、自分の研究(学習)課題を発見した、大学にきてよかったと思った……など) 1) かなりあった 2) いくつかあった 3) ほとんどなかった
- 20 教養課程の講義のなかで、あなたが興味や関心をもって受講していた科目はいくつぐらいありましたか 1) 10科目以上 2) 9~7科目 3) 6~4科目 4) 3~1科目 5) なかった
- 21 あなたは、現在所属している「専攻」・「選修」が自分に適していると思っていますか。1) 適している 2) わからない 3) 適していない 4) 教育学部自体が自分にあっていない
- 22 あなたは、自分の「専攻」・「選修」の学問分野については、他の専攻選修の学生より「より多く勉強している」と思いますか。1) かなり深く勉強している 2) いくらか多く勉強しているがそう差があるとは思えない 3) とくに中心をおいていない
- 23 教育学部の講義のなかで、あなたが興味や関心をもって受講した科目はいくつぐらいありますか。1) 10科目以上 2) 9~7科目 3) 6~4科目 4) 3~1科目 5) ない
- 24 教育学部の講義のなかで、あなたに強い影響を与えたものがありますか。(たとえば、学問にたいする興味や関心を触発した、自分のものの見方や考え方を変えた、自分の研究(学習)課題を発見した、大学にきてよかったと思った……など) 1) かなりあった 2) いくつかあった 3) ほとんどなかった
- 25 あなたは、教育学部の講義にどのくらい出席していますか(全体的に) 1) よく出席している 2) 科目にもよるが比較的よい方だろう 3) 普通だと思う 4) 自分の関心のある科目以外はあまり出席しない 5) 全体としてあまり出席はよくない

- 26 あなたは、これまでの大学での学習（教養課程を含む）で、どんな「力」を身につけたと思いますか。次の各領域・分野ごとに3段階（1…かなり自信がある 2…いくらか自信がある 3…とても自信がもてない）で自己評価して（ ）内に1～3で記入してください。
- A) 一般教養(外国語を除く) ( ) B) 外国語 ( ) C) 教科専門……人文科学 ( )  
社会科学 ( ) 自然科学 ( ) 芸術・体育 ( ) D) 教職専門……教育学 ( )  
心理学 ( )
- ※ 教科教育学は関係のある教科専門にふくめて、障害児教育学は教職専門の教育学か心理学のいずれかにふくめて考えてください。
- 27 あなたの「教育」や「教職」についての考え方は、これまでの教育学部での学生生活のなかで変わりましたか 1) 教師になってがんばろうという気持ちが強まった 2) 教師になることに自信がもてなくなった 3) とくに変わったことはない 4) 教職以外の職業を選ぶつもり

質問は大きく6つの領域で構成した。「属性」は7項目で、「4 学年」「6 教養課程在籍期間」で「卒業延期生」と「教養留年の有無」をチェックしている。「高校時代」には6項目を用意し、高校時代にどのような青年期をすごしてきたかをみようとした。「大学入学時点」は「大学選択理由」と「大学生活への期待」の2項目で、学生の大学生活についての目的意識や期待をとらえようとしている。「教養課程の生活」、「専門課程の生活」はそれぞれ5項目で、そのうち3項目は同じ質問文で、教養課程と専門課程を比較できるようにしてある。「20」「23」の「興味や関心をもって受講した科目はいくつ」という質問は、学生の学習意欲・自発性をみようとしたものである。最後に、「大学教育の成果」について学習成果の自己評価(26)と教育・教職観の変化の二つの面をとらえようとした。「26」の自己評価は各領域について3段階での評定を求めたが、サンプル回収後、A) 一般教養と B) 外国語の評点を合計して「一般教養」、C) の人文・社会・自然の評点を合計して「教科専門」、D) 教育学、心理学を合計して「教職専門」に縮約した。教科専門に「芸術・体育」を含めなかったのは集計点が2桁になると処理上困難であることが主な理由である。

サンプリングの方法は、通常の統計調査法の方法によらなかった。これは前述のように「延期生」の生活調査に一つの目的があり、在籍学生に占める「延期生」の割合は15%弱であるから通常の抽出法では延期生の標本数がかなり小さくなることが予想されるからである。この調査でのサンプリングは学部での必修講義の受講生（「教育原理」の「小学課程対象」と「中学課程対象」の2科目）に講義時間を利用して質問紙を配布・回収するという方法でおこなった。当初予定数より受講生はかなり少なかった（前期と後期で受講生数が変動する）ので「障害児教育」と「教育学」の2つの受講生も対象に加えた。以上の方法での標本数は265で、延期生は18(内数)であった。延期生名簿でこの回答をよせた学生を除いた全員に質問紙を郵送して、最終的には延期生の標本は55(48%)となった。標本と調査対象の母集団との関係は第2表の通りである。

第2表にみるように、課程別・学年別にみると抽出率はかなりバラツキがあり、比較にあたってこの点を考慮しておくことが必要である。通常の学生と延期生の関係では、小学と養護についてはほぼ同率とみてよいが、中学では約2倍、特別体育では約3倍の延期生が抽出された結果になっているので、中学や特別体育の全体的な特徴はかなり延期生の特徴に影響されていることが推測され

第2表 標本の構成

	小 学		中 学		養 護		特別体育		計	
	4年以下	延期	4年以下	延期	4年以下	延期	4年以下	延期	4年以下	延期
在 籍 数	431	57	178	50	38	3	59	13	706	123
標 本 数	166	23	43	23	28	2	10	7	247	55
抽 出 率 %	39	40	24	46	74	67	17	54	35	48

（教養課程在籍数は除く）

る。課程間の比較も特別体育については標本数自体がかなり少ないから有効ではない。以下の分析では「延期生」については課程の区別をせず一括して取り扱い、また質問によって選択肢が多いものをクロスした場合、セルのデータ数がかなり小さくなるので、適宜大きな区分に集計し直すようにした。

さて、以上のサンプリングの方法上の問題とともに、この調査方法（専門課程に進学した学生を対象にし、講義受講学生から抽出したこと）には更に次のような問題が含まれていることをおさえておきたい。この調査は大学生の学習生活の問題点を発見すること、とくに「問題をかかえている学生」の特徴をとらえようと考え、「問題をかかえている学生」として「延期生」を指定した。第一の問題はこの「延期生」を「問題学生」と想定したことが妥当であるかどうかである。たしかに延期生は通常の学修期間で卒業できなかった学生という点で「問題」ではあるが、しかし通常の学生生活をおくっている学生に「問題」がないわけではない。この点については後の分析で検討する。問題は、延期生よりも長期欠席者や退学者などにあると思われるが、これがこの調査では対象から除かれていることである。また学部在籍者（教養課程をおえ学部に進学した者）のみを対象としたため、未だ学部に進学できず教養に留年している者が除かれている。従ってこの調査で対象とされた「延期生」は、少なくとも以上の2つのフィルターで除かれた残りの学生である。さらに延期生全員に質問紙を郵送したが、回収できたのは105のうち37（35%）で、恐らく回答しなかった学生の方が、より問題のある学生であろうと思われる。つまり延期生55のうち18名は講義に出席している学生であり、残りの37名も大学との心理的距離の近い学生であって、そういう点から云えば「問題をかかえている学生」とはいえないかも知れないのである。この点では通常の学生についても同様で、今回の講義時間を利用したサンプリングでは「問題をかかえている学生」が少なくなっている可能性を考慮しないわけにはいかない。以上のような点から「延期生」についても「通常の学生」についても、実態よりも「甘い」ものになっている可能性があることを、以下の結果を読むときに考慮しておく必要があると思われる。次の第3表は以上の考察の参考として最近5ケ年の退学者、教養留年者の状況をまとめたものである<sup>1)</sup>。（教育学部のみ）

教育学部の退学者の在籍数に対する割合は、他学部にくらべて低く、また初年度の退学者が少ないという特徴がある。概して退学者の半数が教養課程であり、また満期退学者が多い。留年者の統計は説明を要する。本学部では通常の学生は、教養課程1年半をおえると10月に学部に進学する。

第3表 退学者と教養留年者

年度(昭和)	52	53	54	55	56	平均
退学者数	12	21	23	18	14	17.6
退学時期						
初年度	1	3	1	1	2	1.6
教養期間	2	4	6	1	2	3.0
教養満期	1	3	7	7	5	4.6
小計	4	10	14	9	9	9.2
学部期間	4	3	3	3	1	2.8
学部満期	4	8	6	6	4	5.6
小計	8	11	9	9	5	8.4

	当該年の10月						翌年4月		
	教養在籍 数	学部進学 者数	留年者数	前年からの 留年者数	右の学部 進学者数	右の再留 年者数	前年からの 在籍者数	右の進学 者数	右の再留 年者数
昭和52年	372	292	80	37	13	24	104	47	57
53	352	287	65	57	15	42	107	52	55
54	344	285	59	55	20	35	94	48	46
55	339	288	51	46	21	25	76	40	36
56	374	312	62	36	13	23	85	45	40
57	359	308	51	40	17	23	74	—	—
平均(除57年)	356.2	292.8	63.4	46.2	16.4	29.8	93.2	46.4	46.8
%	100.0	82.2	17.8	100.0	35.5	64.5	100.0	49.8	50.2

そのとき進学条件をみたすことができなかった学生は教養に留年し、翌年4月に再び進学の判定が行われる。52年の数値について説明すると、教養在籍数372は51年入学者の数であり、このうち292名が学部に進学し、80名が進学できず教養に留年することになった。この時、前年からの留年者(50年以前の入学者である)37名のうち13名が進学し、24名が再び留年をくりかえすことになる。この80名と24名の合計が次の欄の104名で、この学生は翌年(53年)4月に再び進学判定をうけ、47名が進学し、57名は再び留年をする。これが53年10月の前年からの留年者数57名になる。この調査の時点は7月であるので、教養留年者は相対的に少ない時期である。

## 2 教育学部学生の学習生活の類型

最初に、今回の調査のデータを多変量解析「数量化Ⅲ類」でパターン分類をした結果を報告する。この手法についての説明は省略するが、サンプル(学生)とアイテム・カテゴリー(質問にたいして選択された回答選択肢)との関係をパターンとしてとらえたもので、「同じような反応パターンを示すもの同志(サンプル)は近い値を、また同じようなものから選択される特性(カテゴリー)



6 (教養期間)	1年半 2年 2年半～以上	養正規 養留年1回 養留年2以上
8 (高校生活)	充実・満足 とくに不満はない なんともいえない いろいろ不満 はやく卒業してしまいたい	高校+2 高校+ 高校0 高校- 高校-2
9 (熱中体験)	あった なかった	熱中+ 熱中-
11 (先生)	いた いなかった	先生+ 先生-
13 (親友)	いた いなかった	友+ 友-
16 (教養生活)	充実していた とくに不満はない むなししい感じ	養充実 養不満なし 養むなししい
18 (教養出席)	よく出席した 比較的よい方 普通 関心のある科目は あまり出席しなかった	養出席+2 養出席+ 養出席0 養出席- 養出席-2
19 (教養の影響)	かなりあった いくつかあった ほとんどなかった	養影響+2 養影響+ 養影響-
20 (関心をもって受講)	10科目以上 9～7科目 6～4科目 3～1科目 なかった	養自発+2 養自発+ 養自発0 養自発- 養自発-2
21 (適性)	適している わからない 適していない 教育学部自体があていない	適性+ 適性? 適性- 学部不適
22 (専攻の学習)	かなり深く いくらか多く とくに中心をおいていない	専攻+ 専攻0 専攻-
23 (関心をもって受講)	20の質問と同じ	学部自発+2, ……
24 (学部の影響)	19の質問と同じ	学部影響+2, ……
25 (学部での出席)	18の質問と同じ	学部出席+2, ……
26 (学習成果)	一般教養の合計を良い方から 教科専門の合計を良い方から 教職専門の合計を良い方から	教養+2～-2 教科+3～-2 教職+2～-2
27 (教職観の変化)	かんばろうという気持ちが強まった 自信がもてなくなった とくに変わったことはない 教職以外の職業を選ぶつもり	教職意欲 教職不安 教職観不変 教職放棄

リーが配置されている。その固有値と相関係数は、第1軸（X軸）が 0.159 と 0.40、第2軸（Y軸）が 0.149 と 0.39 で高い値ではなく、従って全データにたいする説明力は十分とはいえないが全体の構造はかなりよくあらわしているようである。

カテゴリーの布置状況から、第1軸は大学での学習生活における意欲の強弱を基準として分類し第2軸は自己の状態についての意識・自覚の明確さ、あるいは生活態度における積極・消極をわけていると解釈される。この図では、おおよそ6つのタイプに教育学部の学生を分類できるが、そのタイプの特徴点は次のようにまとめることができよう。（図中の説明語は、選択肢の内容を要約したもので、第4表にその対照表を示した。）

A群 教養生活が充実しており、教養の講義にも学部の講義にも積極的・自発的な学習意欲をもち、かなりの講義から影響をうけ、自分の専攻分野の学習に力を入れ、教科専門・教職専門の学習成果に自信をもっている学生群

B群 教養・学部ともに講義の出席はきわめて良く、講義にたいする自発性もある学生群、ただし学習成果については必ずしも自信がもてない。

C群 高校時代、熱中体験があり、好きな先生もいたし、親友もいて、高校生活に充実感をもっており、学部での専攻に適性があると思ひ、教職への意欲も強く、教職専門にも自信をもっている学生群である。しかし教養の成績は自信がなく、学部の講義の出席も自分の関心のある講義以外はあまり出席は良くない。

D群 高校生活にやや不満があり、熱中体験なく、現役で大学に進学し、教養時代はとくに不満もなく、授業の出席も良い方で、教養課程は1年半で学部に進学、学部での学習意欲は普通で学部の講義で影響をうけたものもいくつかあるが、学部の専攻については適しているかどうかわからない状態で、専攻分野の学習に集中することなく、教科専門・教職専門ともに自信がもてず、教職につくことに不安を感じている学生群。

E群 高校時代、好きな先生も親友もいない状態で、はやく高校を出てしまいたいという強い不満を感じており、大学進学後も教養の講義で興味・関心をもって受講したものもなく、講義から影響をうけることもなく、むなしい感じで教養時代をすごし、学部に進学しても、専攻が適していないと感じ、専攻分野の学習もとくにせず、出席も悪く、自発的に受講した科目もなく、教科専門、教職専門ともに全く自信がなく、教育・教職についての考え方も変化をうけなかった学生群。

F群 教養時代も学部に進学してからも、学習の自発性は全くなく、出席も全体的に悪く、学部自体が自分に適していないと感じ、講義から影響をうけることも全くない学生群。

これらの6つのタイプで、F群（無気力・不適応者）は他の群からかなり分離されており、特異な（例外的な）存在であるとともに、その群自体が必ずしもまとまっていない（上記の特徴をすべて備えているわけではない）が、他の群は比較的まとまっておりまた相互に近接して流動的であることがわかる。



この図の中に、性別、所属：専攻、学年、現・浪、教養期間等のプロットがある。これは X-Y 軸と 45° の角度の線上とその周辺にある。男子は生活態度は積極的であるが学習意欲は弱く、女子は反対に生活態度は消極的・あいまいであるが学習意欲は強いという傾向を示している。第Ⅲ象限に、教育・心理、家政、養護が位置するのはこれらの専攻・課程は女子が多いからであろう。第Ⅰ象限のこの線の周辺に延期生1年、延期生2年以上、教養留年1回がある。中学・高体(特別体育)は前に説明したように延期生、教養留年者の比率が高いので、そこに近接している<sup>2)</sup>。ここで延期生1年と教養留年1回は、学習意欲に問題はあるが比較的積極性があり、通常の男子、中学、実技系の学生とあまり変わらないようであるが、延期生2年以上ととくに教養留年2回以上はF群に接近しておりこれらの学生はかなり問題である。D群は学部進学直後の3年生の一般的なタイプであろう。これが学習過程のなかで、多くの部分は4年でC群になり、積極的な者はB群さらにA群へ、消極的・学習意欲の弱い者はE群へと変っていくように思われるのである。

さて、A～F群を特徴づけ分類しているアイテム・カテゴリーの代表的なものを取りあげて整理してみると第5表のようになる。

第5表 A-F群を特徴づけるアイテム

No. アイテム/群	A	B	C	D	E	F
20 教養自発性	+2	+, 0			-	-2
18 出席		+2		+, 0		-2
19 影響	+2	+			-	
21 適性			+	?	-	-2
23 学部自発性	+2	+		0	-	-2
25 出席		+2		+	-	-2
24 影響	+2			+		-

## 第1軸

アイテム	レンジ
学部自発性	17.91
教養自発性	17.60
教養出席	14.70
学部出席	12.11
学部影響	12.04
教養期間	11.83
適性	10.71
学年	9.16

## 第2軸

アイテム	レンジ
所属	13.54
教科専門	13.27
教養専門	11.75
学部自発性	10.85
学年	9.92
高校充実度	9.61
専攻	9.54
学部影響	9.28

各アイテムにおけるカテゴリー数値の幅(レンジ)の大きいもの

自発性は A, B 群と E, F 群をわけ、出席は B と D, F を、適性は C, D, E, F をわけののに効いているようである。影響は「+2」は A 群であるが、「+」や「-」は教養と学部では異なっている。第5表にあげたアイテムは、A～F 群にわけののによく効いているが、これは偏相関と同様の意味をもつレンジからも確められる。そこでこれらのいくつかについて、質問のどの項目と関連

第6表 各アイテム間のクロス関連表

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	26	26	27
アイテム	性別	所属	専攻	学年(延期生)	現・浪	教養留年	職業	高校充実度	熱中体験	熱中対象	先生との関係	先生の魅力	親友の有無	大学選択理由	大学生活の期待	教養充実度	充実の内容	教養出席	教養影響	教養自発性	適性	専攻の学習	学部自発性	学部影響	学部出席	1一般教養(計)	2教科専門(計)	3教職専門(計)	教職観変化
4 延期生	◎	◎	◎	/		◎	◎	◎	○		○					○		◎	◎	◎			○		◎	○	○	◎	◎
6 教養留	◎	◎	◎	◎	/			◎	◎	◎		○						◎	◎										◎
21 適性		◎	○	○				◎										◎			/	◎	◎	◎		○	○	○	◎
23 学部自発性				◎						◎				◎		◎	◎	◎	◎		◎	/	◎	◎		◎	○	◎	◎
24 学部影響										○				◎				◎	◎	◎	◎	◎	/	◎		◎	◎	◎	◎
26 成績			◎			○		◎		○		○				◎	◎	◎	◎		◎		◎	◎		◎	◎	◎	◎
27 教職観	◎	○	○	◎						○				◎				◎			◎		◎	◎				◎	/

しあっているかをみるため、それぞれのクロス集計を求め、そのクロス項目間の関連を  $\chi^2$  検定でしらべた。第6表は、◎5%水準で「独立」仮説が棄却できるもの、○は10%水準のもの、無記入は10%水準では棄却できないものである。

このクロス表で、上側の 26.1 一般教養～26.3 教職専門 は前述の合計点を出したものでクロスさせた。左側の「4 延期生」は学年を4年以下と延期生の2区分、「6 教養留年」は通常期間1年半とそれ以上の2区分、「23 自発性」は「7科目以上」「6～4科目」「3科目以下」の3区分、「26 成績」は、教科専門と教職専門の合計を成績良好群(135サンプル)と成績不振群(167サンプル)の2区分にあらたにわけたものである。この表からわかるように、「延期生」は「教養時代」と「学習成果」の関連が強く、「教養留年」は「高校時代の生活」と「教養時代」の関連が強いというように、やや関連する領域にちがいがみられる。「適性」は「学部生活」と「学習成果」に関連している。「自発性」「影響」「成績」はかなり共通した関連がみられ、この三つは相互に近い関係にあることを推測させる。「教職観の変化」は「先生」「大学選択理由」「教養影響」「学部影響」という学生の「感受性」と深い関係のある項目との関連が目立ち、出席とか教科専門の成績など学習との直接的な結びつきは弱いようである。「高校生活」では「高校充実度」と「先生」が関連する項目が多く、「大学選択理由」も学部生活に関連するところが大きい。

以上の学生の学習生活の概観を簡条書的に要約しておく。

1) 学習生活におけるタイプは、学習意欲の強弱と生活態度の積極・消極の二軸によってわけられ

た。前者には、学習における自発性や出席状況が大きく作用しており、また適性の意識もかなり関係がある。後者には、学年や高校充実度なども効いている。

- 2) 学習生活のタイプは6群にわけられるが、「無気力・不適応」のF群は他の5群から孤立している特異な群である。
- 3) 学習生活の特徴づけるアイテムは、相互に密接に関連しあっており、学生の学習生活を規定している要因は単純ではない。高校生活のありかたは、教養留年や卒業延期生と関連がみられ、大学選択理由は学部での学習生活と関連があるなど、学生のそれまでの生活体験は大学での学習生活のタイプに影響しているように思われる。
- 4) 学習生活のタイプは、性別、学年別で推移がみられる。一般的には学部進学当初はD群（生活態度あいまい）であるが、大学生生活のなかで、より積極的なC群、さらにB群、A群へという変化と、より消極的・学習生活不適応なE群への変化がおこるようである。
- 5) 「延期生」は必ずしも「不適応」な「問題学生」であるとはいえないが、延期2年以上や教養留年2回以上の学生は、かなりF群に近い「問題的傾向」をもつように思われる。

これらの定性的な関連を手がかりに、以下では学生生活の各時期毎に、各アイテム・カテゴリーの具体的な量的関係（どのくらいの学生がどういう傾向を示すか）について分析してみよう。

### 3 高校時代の生活

高校時についての質問にたいする回答状況は第7表の通りである。各質問で最上段の数値は全体集計、次の段は前回調査の結果を参考に記した。その下は「延期生」と「教養留年生」のものである。なお%はすべて小数点以下を4捨5入した。延期生、留年生のクロスは通常の学生の部分は省略した。右端の検定欄の◎、○などは $\chi^2$ 検定で5%で有意、10%で有意を示したものである。

教育学部の学生の高校時代の生活は、充実が20%、とくに不満なしと合計しても41%で、かなり不満を感じていた学生が多い。これは前回調査よりかなり不満が高くなっている。延期生、教養留年生はほとんど変わらず、彼らの満足群は約60%で一般の学生よりかなり高い。しかしそれは中間部分が減っているからで、不満部分も多い。この一般学生との差は「有意」である。熱中体験は前回よりやや多くなっている。そしてこれも延期生、教養留年生がともにより多くなっている。これは前問とも関係がありそうである。高校生活の充実が熱中体験の有無と関係がある（後述）が、その熱中の内容が問題である。これも前回とほぼ似た傾向になっているが、上位からみていくと、第1位 スポーツ 第2位 芸術 第3位 交友 第4位 文芸 である。延期生では第1位が46%とほぼ半数に近く、スポーツ、芸術、交友 と傾向は変らない。教養留年生では、第1位スポーツがさらに多く59%で、次が交友である。このことから先の延期生、教養留年生の高校充実感の高さはこのスポーツ熱中と関係があり、それが大学進学後の学業をおろそかにさせることにつながっているのではないかと推測される。先生との関係も前回よりやや改善されている。延期生、教養留年生

第7表 高校時代の生活

選 択 肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9	備考
8 高校充実度 (前回) 延期生 教養留年	20	21	11	27	21					
	14	42	17	21	7					
	26	33	4	16	22					◎
	25	35	2	13	27					◎
9 熱中体験 (前回) 延期生 教養留年	67	34								
	61	39								
	75	26								NS
	81	19								○
10 熱中対象 (前回) 延期生 教養留年	10	27	4	2	33	1	4	11	7	
	11	24	11	3	21	1	5	23	—	
	7	15	0	2	46	0	7	12	10	NS
	2	6	0	2	59	2	5	10	5	◎
11 先生との関係 (前回) 延期生 教養留年	74	26								
	65	35								
	67	33								NS
	79	31								NS
12 先生の魅力点 (前回) 延期生 教養留年	4	7	30	8	4	14	12	18	4	
	8	8	16	10	5	13	12	15	8	
	0	6	33	8	3	28	3	17	3	NS
	3	5	32	13	5	18	8	21	3	◎
13 親友の有無 (前回) 延期生 教養留年	84	16								
	90	10								
	86	15								NS
	82	18								NS

では若干上下しているが「有意な差ではない」。教師の魅力点は傾向的には変りない。その上位のものをあげると、第1位 指導の熱意 第2位 あたたかみのある人柄 第3位 生徒の気持をよく理解で、延期生、教養留年生もその%自体は変動しているが3位までにあげている特徴は同じである。親友の有無も前回と大差はなく、延期生、教養留年生も差がないとみてよい。

第8表 各アイテム間のクロス

	高 校	熱 中	先 生	親 友
高校充実度	—	◎	◎	◎
熱中体験	◎	—	◎	NS
先生との関係	◎	◎	—	NS
親友の有無	◎	NS	NS	—

高校生活に関する質問相互の関係は、第8表のように「親友」を除いてはつきりと「有意」な関連が認められる。高校充実感は熱中体験、先生との関係、親友の存在を要素としているとみてよいだろう。そして熱中と先生との関係が強い関連を示すのは、学生の気質・性格のような両者に共通

する因子を予想させる。この高校充実感との関係を具体的にみると第9表の通りである。

第9表 高校充実感とのクロス

	高 校 充 実	な ん と も い え な い	高 校 不 満
熱中 あり	53	6	42
なし	21	22	57
先生 あり	47	10	44
なし	30	14	56
親友 あり	46	11	43
なし	23	10	67

第9表をみると高校充実感にもっとも効いているのは「熱中の有無」で、その差は $53-21=32\%$ 、これにたいして高校不満感にもっとも効いているのが「親友の有無」で、 $67-43=24\%$ の差がでている。先生は熱中と近い数値である。「熱中」と「親友」は学生の高校生活の充実・満足感の異なった側面で関連しているのであろうと思われる。

次に高校生活と大学生活との関係をみよう。第10表は「学部での学習の自発性」と「成績」についてクロスしたものである。

第10表 高校生活と大学生活とのクロス

	学習自発性			備 考	成 績		備 考
	大	普通	小		良好	不振	
高 校 充 実	39	48	13	NS	57	43	◎
な ん と も い え な い	30	39	30		36	64	
高 校 不 満	40	37	23		36	64	
熱 中 あり	39	43	19	NS	48	53	NS
なし	39	41	21		39	61	
先 生 あり	43	42	15	◎	48	52	○
なし	26	42	33		36	64	
全 体	39	42	20		45	55	

学習の自発性にたいしては「高校充実度」は「自発性小」の部分でやや関係が認められるが、有意ではない。熱中はほとんど変らない。「先生の有無」は「有意な関連」が認められる。それはとくに「先生との関係」がなかった者に著しい。成績は教科専門と教職専門の総合したものを上下に2分したものとクロスであるが<sup>3)</sup>、全体的に高校生活における好ましい経験をもっている者は成績良好群が多くなっている。これはとくに「高校充実感」がよく効いている。「熱中」も同様の傾向を示しているが「有意ではない」。高校生活の充実は、やはり大学生活の学習生活における基礎的な条件をつくりだしているとみてよいであろう。

#### 4 大学進学における選択と期待

学生は大学進学においてどのような観点で大学を選び、また大学生活に何を期待していたであろうか。また、この選択や期待はそれまでの高校生活やその後の大学生活とどのような関連をもっているだろうか。これらについてのクロス表が第11表である。

大学の選択、期待は7選択肢から2つ選ぶという回答形式であるから、その総数は標本総数よりも多くなるが、割合は標本総数302を分母として求めた。クロス表の方はこの回答を積極・中間・消極の三区分に集計し直した形にしてある。選択では、主体的目的的选择(1鹿児島大学に2教育学部に)中間的(3地理的条件)他律的・あいまいな選択(4学校(教師)の進路指導5親の希望6とくに希望せず)、期待では、積極的期待(1大学の講義)中間的(2サークル活動3交友)消極的・あいまいな期待(4自由な時間5親から自由に6自分の趣味を深める)に縮約した。クロスした項目の選択肢で省略したものもある。表に明らかなように、関連が「有意」に認められるものは多くはない。(なお、これまでのクロス表における $\chi^2$ 検定の結果と異なるものがあるが、それは再区分してカテゴリー数が増えたためである。)しかし「有意でない」ものでも、個々のクロス・セルにおいて意味のある解釈が可能な変動がみられる。たとえば「高校充実が他律的選択が少なく、消極的期待もやや少ない」「好きな先生がいなかった者は主体的な選択が少なく消極的期待が多い」「教養留年は主体的選択は多いが、積極的期待がきわめて少ない」「教養生活がむなしという群では主体的選択がかなり低くなっている」などである。このような選択、期待の積極・消極と学習生活における積極・消極の相関的な関連は「有意」なものではよりはっきりと示されている。「適性」では「あり」と「学部不適」とでは主体的目的的选择者の割合は66%と20%と大きく差があるし、学部での「学習の自発性」の大小も目的的选择で68%と34%、消極的期待では61%と90%と大差を示している。「学部講義の影響」が「かなりある」と「なし」では目的的选择では89%と23%というちがいがでている。このように、大学進学時に大学をどのように選ぶかという学生の主体的・自覚的选择や大学生活にたいする期待の内容はその後の大学での学習生活のあり方と深くかかわっていることがわかるのである。なおこのクロスでは「期待」は全体としてその関連が弱いようである。それはやはり大学生活にたいする社会一般の風潮、「とにかく大学に入る」というモラトリアム期間的にとらえる傾向が大多数の学生の意識を支配しているからであろうと思われる。(これについては前報でも指摘した。)しかし次のクロス表にみるように、選択と期待は有意な関連があり、学生の大学選択の意識と期待の内容とは相互作用があると考えらるべきであろう。この意識に働きかけることが、学生の大学生活を活性化するうえでは大切であろう。目的的选择をしている学生(総数の30%)においても期待の内容が積極的なものはわずか5%で、消極的なものが10%と2倍である。

第11表 大学の選択・期待

選 択 肢	1	2	3	4	5	6	7
14 大学の選択	15	44	37	21	10	20	13
	59		37	51			
15 大学への期待	26	42	29	43	7	18	4
	26	71		68			

	選 択			期 待				
	主体的 59	中間的 37	他律的 51	積極的 26	中間的 71	消極的 68		
8 高校 充実群 不満群	59	40	40	NS	27	79	64	NS
	56	36	53		27	65	71	
9 先生 あり なし	63	38	45	NS	26	76	67	NS
	49	32	56		25	56	73	
4 学年 4年以下 延期生	60	38	48	NS	26	71	68	NS
	57	33	47		25	71	69	
6 教養 1.5年 留年	58	39	48	NS	28	68	67	NS
	65	27-	51		14	78	68	
16 教養 充実 なんとなく むなし	68	33	39	NS	31	82	53-	NS
	66	38	45		25	67	70	
	45-	37	57		24	73	76	
19 教養 あり 影響なし	65	42	44	NS	30	66	66	NS
	52	31	52		20	69	72	
20 教養 大 自発性 中 小	52	52+	45	NS	34+	59	72	◎
	65	35	49		35+	75	58	
	58	35	47		18-	70	76	
21 適性 あり わからない ない 学部不適	66	40	41	◎	27	76	64	NS
	62	36	47		25	70	71	
	46-	26-	69+		20	60	77	
	20--	40	67++		33+	60	73	
23 学部 大 自発性 中 小	68	39	44	◎	30	81	61	◎
	63	37	46		26	71	66	
	34--	32	59+		17-	49-	90+	
24 学部 かなり 影響 いくつか なし	89	36	36-	◎	36+	64	67	NS
	59	38	47		25	75	66	
	23--	26	71++		19-	52-	90+	
26 成績 良好 不振	56	41	45	NS	26	72	68	NS
	63	34	50		26	70	69	

第12表 選択と期待との関係

	期待積極的 (1)	中間的 (2+3)	消極的 (4+5+6)	その他 (7)	検 定
選択 主体的 目的 (1+2)	59 (4.9)	139 (11.5)	115 (9.5)	5 (0.4)	○
中間 (3)	30 (2.5)	78 (6.5)	84 (7.0)	4 (0.3)	
他律的 (4+5+6)	28 (2.3)	107 (8.9)	111 (9.2)	9 (0.7)	
その他 (7)	6 (0.5)	30 (2.5)	27 (2.2)	3 (0.3)	

各欄の左上の数字は度数，右下の数字（ ）は分母を1208とする％値。この質問は選択肢を2つ選ぶので集計結果は実際の標本数の4倍となる。％値は総数 302×4 として求めた。無回答でクロス表から除かれた標本数の％は30.9％である。

## 5 教養課程の学習生活

第13表 教 養 課 程

選 択 肢	1	2	3	4	5	6	7
16 教養充実度	16	54	30				
17 充実の内容	11	56	40	7	25	20	4
18 教養出席	26	29	18	18	9		
19 講義の影響	2	54	45				
20 学習自発性	2	8	38	45	8		

最初に教養課程の学習生活の全般的な特徴をみておこう。教養生活で充実感をもっていた学生は16％とかなり少ない。大半の54％は「なんとなくすぎてしまったが、とくに不満はない」学生である。前回より「不満」が22％から30％へと増加している。学生が充実感をもったのは、サークル活動56％が第1位で、次が交友40％、第3位が趣味24％である。「大学の講義」は第5位で11％である。前回とくらべると「サークル」が7％増、「交友」が9％減と個々には変動がみられるが、大勢は変わらない。講義への出席状況は、「よく出席」27％、「比較的よい方」30％をあわせると良好群は57％で前回の50％より若干増加している。出席不良群は26％である。講義の影響で「かなり」は2％（前回1％）「いくつか」は54％（前回53％）で前回同様半数近くの学生はなんらの影響も受けていない。学生の学習への自発性は「興味や関心をもって受講した科目」がかなり多いものは2％、多い方が8％で、これを「自発性大」とみるとこの合計は9％台にとどまる。「6～4科目」という中間的な群は38％で、「3～1科目」と「なし」という自発性のほとんど感じられない学生は53％と半数を超えている。

教養生活の充実度とその充実感の対象・内容との関係をみると第14表のとおりである。充実感を



もてた学生は「サークル」「友」「学問」に対象を見出しているものが多く、「アルバイト」をあげている者は少ない。「むなしい」と感じている学生は総体として、自分をうちこむ対象がはっきりしていない感じで、とくに「学問」にたいする関心の薄さが特徴的である。

教養生活の充実度と学習との関係は第15表のとおりである。検定では「有意」でないものがかな

第14表 充 実 と 内 容

内 容	学問	サークル	友	社会活動	趣味	アルバイト	他	検 定
教 養 充 実	31	76	49	10	24	10	4	
なんとなく	9	57	42	6	27	22	2	◎
むなしい	5	44	31	5	21	22	7	
全 体	11	56	40	7	25	20	4	

第15表 充実と学習との関係

教養課程

	教養出席			検定	自 発 性			検定	影 響			検定
	+	○	-		+	○	-		++	+	-	
充 実	65	10	-- 25	NS	14+	51+	35--	◎	4++	61	35-	◎
なんとなく	57	19	24		11	39	50		2	61	38	
むなしい	48	21	31		4--	28-	68+		0--	39-	62+	
全 体	56	18	26		10	38	53		2	54	44	

専門課程

	適性				検定	専攻学習			検定
	あり	わからない	ない	学部不適		かなり	いづらか	していない	
充 実	59	25-	12	4	NS	16+	59	25	NS
なんとなく	49	35	13	3--		13	58	29	
むなしい	45	37	9-	9++		8--	60	32	
全 体	49	34	12	5		12	59	29	

	出 席			検定	自 発 性			検定	影 響			検定
	+	○	-		+	○	-		++	+	-	
充 実	71	20	8	NS	59+	33-	8--	◎	16	78	6--	NS
なんとなく	63	22	15		37	43	21		18	74	9	
むなしい	65	19	17		32	44	24		10--	75	15+	
全 体	65	21	14		40	43	17		15	75	10	

「むなしい」学生についての「教養」と「学部」の比較

	出 席			自 発 性			影 響		
	+	○	-	+	○	-	++	+	-
教 養 時	48	21	31	4	28	68	0	39	62
学 部	65	19	17	32	44	24	10	75	15

りあるが、全体として「充実」が積極的・肯定的な方向に、「むなしい」が消極的・否定的方向に関連している。とくに教養課程において学習の自発性の「-」や影響の「-」は「充実」と「むなしい」では大差となっており、この「教養生活の充実」が学生の学習生活のありようを多面的に反映していることがわかる。これは専門課程の学習生活にも影響を及ぼしているが、その影響は教養時代ほどではない。第15表の「教養と学部の比較」にみられるように、教養時代「むなしい」と感じていた学生も学部では、かなり自発性を示すようになってきており、自発性なしは68%から24%に大きく減少しているし、影響においては「あり」は39%から85%と大きく増加しているのである。なおデータは省略したが教養課程について回答状況は前回とあまり変っていない。

## 6 専門課程の学習生活

第16表 専門課程の学習生活

項目 \ 選択肢	1	2	3	4	5	6	7	8	9
21 適性	50	34	12	5					
22 専攻学習	12	59	29						
23 学習の自発性	12	27	42	18	2				
24 講義の影響	15	75	10						
25 出席状況	33	33	21	9	5				
26 一般教養	3	51	46						
外国語	5	30	65						
一般教養(総合数)	—	—	7	16	41	35			
人文科学	8	57	35						
社会科学	7	42	52						
自然科学	8	31	61						
教科専門(総合)	—	—	—	3	6	21	24	23	22
芸術・体育	18	47	35						
教育学	5	59	37						
心理学	5	60	35						
教職専門(総合)	—	1	7	45	21	25			
学習成績(総合)	45	55							
27 教育・教職観の変化	53	23	18	7					

専門課程での学習生活の状況は前回調査よりも若干良い部分が増加している。たとえば講義の影響で「かなり」と回答したものは前回6%が今回は15%である。全体的に10%前後の良い方向への変化がみられるが、個々に数値を示すことは省略する。適性を自覚している学生は50%で前回とほとんど変わらない。「不適」と「学部不適」は合計17%である。自分の専攻分野の学習に力を入れている学生は71%でかなり多いが、その学習に自信をもっているのは12%とかなり少ない。前回調査では、これは小学課程のカリキュラムの問題からくるのではないかと推定したが、今回は中学課程の学生を含めた調査であるのに、この数値は前回(11%)とほとんど同じである。学習の自発性は

先にも述べたように教養時よりは向上しているが、「自発性」がほとんどないとみられる部分が20%もいる。「講義の影響」も「かなり」という学生が15%、「いくつか」も含めると90%と大多数の学生が講義から影響をうけている。「出席」もかなり良い。「よく出席」と「よい方」を合計すると66%とほぼ3分の2の学生は「出席良好」と自己判断している。「出席不良」を自覚している学生は5%で前回の半分である。これらは教師の側の実感ともそうへだたりはないように思われる。このように出席も良く学習の自発性も比較的良いのであるが、学習成績はどうであろうか。これは学生の自己評定であるが、「かなり自信がある」学生はどの領域でも多くない。芸術・体育で18%とかなりの比率を示すが、他は5~8%である。「とても自信がもてない」は外国語65%を最高に、自然科学61%が特徴的である。その他は大体35%程度である。しかしこの35%というのはいずれもかなり高い割合である。総合したものでみると、「一般教養」では「一般教養」「外国語」の両方とも自信がもてない学生が35%いる。「教科専門」では3領域ともに自信がもてない学生は22%「教職専門」では25%である。ほぼ4分の1にあたる学生が大学教育のほぼ全領域において「自信がもてない」状況である。大学教育・大学生活のなかで「教育・教職観」はどう変わったかという点では53%の学生は「教師になってがんばろうという気持が強まった」と肯定的な変化を認めている。これはどう評価するかむずかしいが、前回調査よりは8%ほど向上している。「変らず」という学生は18%でこれもかなり減少している。前回には設けていなかった「教職以外の職業を選ぶつもり」という方向転換を考えているものは7%でやはり教育学部の特色が出ている。

## 7 学習生活の特徴の個別的検討

### A) 専攻分野の「適性」について

先に前報で、専攻分野の学習に集中度が弱いのは小学課程のカリキュラムに問題があるのではないかという推測をしたが、この点について確かめるため、「所属」「学年」「専攻」によるクロスしてみたのが第17表である。「適性」は課程で大きく異なり、「特体」は圧倒的に「適性」とする学生が多い。これは課程の性格がきわめてはっきりしていて、学生の選択意思が明確なのであろう。やはりその点で、専攻の明確な中学課程がかなり良く、小学課程は低い。しかしとくに問題なのは養護学校教員養成課程である。この課程はその性格はきわめてはっきりしていると思われるにもかかわらず「適性あり」はきわめて低く、圧倒的に「わからない」が多い。これは更に検討して見る必要がある。(後述するように、学習成績の面でも問題がある。)「適性」は大学生活の経験のなかで自覚されていく面があり、「学年」とのクロスも「有意」である。3年から4年になると「わからない」が減り、「適性あり」が増加する。これは「延期1年」まで同傾向であるが、「延期生」の場合には「適性なし」という自覚も増大する。適性の自覚という面からみると「延期1年」はとくに問題はない。やはり問題なのは「延期2年以上」で「適性あり」が減少し、「なし」と「学部自

第17表 適性と専門学習

所 属	適性あり	わからない	なし	学部不適	検定	専門学習 かなり	いづらか	なし	検定
小 学	43	37	14	5		11	55	34	
中 学	68+	18--	9-	5	◎	18++	61	21-	NS
養 護	33-	60++	0--	7+		7--	76+	17--	
特 体	77++	12--	12	0--		12	65	24	
全 体	50	34	12	5		12	59	29	
学年 3年	42	40	11	7+		11	56	34	
4年	57	31	9	2--	◎	10	66	24	NS
延期 1年	60	26-	14	0--		21	62	18	
2年以上	50	15--	20++	15++		15	45	40	
専攻 教・心	48	41	6--	5		14	63	23-	
国・英・社	42	38	11	9++		6--	59	35	
理・技・数	46	38	13	4	○	7--	63	30	◎
家 政	48	29	24++	0--		5--	52	43+	
美・音・体	65+	18--	15	3--		24++	50	26	

	専門学習 かなり	いづらか	なし	
適性あり	19++	66	16--	
わからない	5--	61	34	
なし	9-	43-	48++	◎
学部不適	0--	20--	80++	

体が不適」という部分が顕著に増大している。「延期生2年以上」には学部の学習生活に不適應で悩んでいる者がかなりいるとみてよいだろう。「専攻」も「有意」な関連を示している。「美・音・体」の実技系は、やはり「適性あり」の割合が大きい。しかし他の専攻ではあまり大きな差はないが、「家政」で「適性なし」が顕著に多い。また「国・社・英」に「学部不適」がかなりみられる。

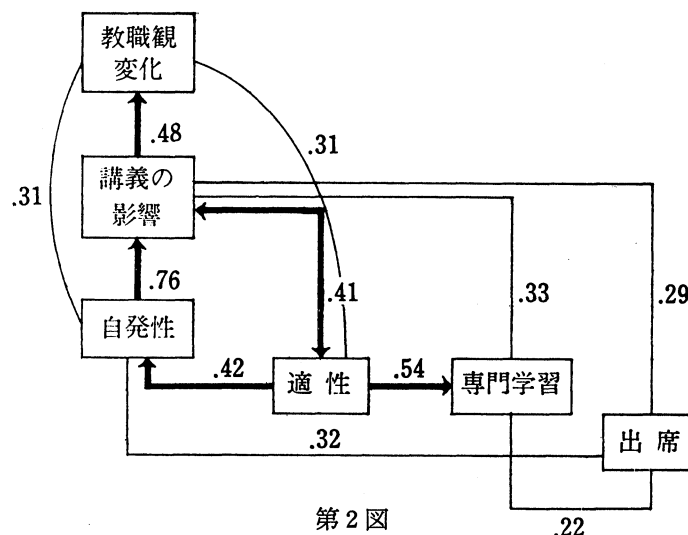
「適性」は、このように所属・学年・専攻でいずれも「有意」な関連が認められたが、それは「専門領域の学習」へのとりくみにどのように影響しているであろうか。第17表の下表にみるように「適性」と「専門学習」とは「有意」な関連はあるが、「専門学習」を「かなりしている」という学生自体が比較少ないので、「適性なし」と「学部不適」に「専門学習をとくにしない」者が多いという否定的な部分に変化が大きくあらわれている。「所属」「学年」での変動はあまり大きくなく「有意」な差は認められない。しかし全体的に比較すると、「小学課程」に「専門学習をしない」者が多いこと、「中学課程」は「専門」を「かなりしている」者が多く「なし」が少ないという、カリキュラムに関する当初の推定を裏付ける結果は認められる。「学年」では基本的な傾向として学年を経るごとに「専門」への集中が増大していく傾向がみられる、しかし「延期2年以上」はあきらかに「否定的」な部分が増大している。「専攻」との関連は「有意」で、「実技系」が「専門への集

中」が相対的に良く、「適性」との関係を反映している。「教育・心理」もそれに次いで良くとくに「なし」が少ない。その他の専攻では「家政」に「なし」がきわめて多いことが注目されよう。これらの傾向は、後述の学習成果の自己評定においてより明確に示されている。

## B) 専門課程の学習生活の項目間の関係

第18表 専門課程の学習生活の相互クロス表

番 号		22	23	24	25	27
		専門学習	自発性	影 響	出 席	変 化
21	適 性	◎ 0.536	◎ 0.418	◎ 0.407	NS 0.116	◎ 0.307
22	専門学習		NS 0.208	◎ 0.329	◎ 0.221	NS 0.116
23	自発性			◎ 0.759	◎ 0.316	◎ 0.306
24	影 響				◎ 0.294	◎ 0.476
25	出 席					NS 0.128



第2図

専門課程の学習生活に関する項目の相互の関係は、第18表のように「有意」な関連が認められる。この表中の数字は Goodman-Kruskal の順位連関係数である。この係数を参考にしながらこれらの項目間の関係を図示したものが第2図である。これらの項目の関連は必ずしも因果的連関とはいえず、恐らく多くの場合これらは何らかの他の因子を媒介して関連しあっていると考えるべきものであるが、ここでは仮りにこれらの項目間だけの構造を考えてみたものである。大学教育・大学生活の総体的な結果をあらわしていると考えられる「教育・教職観の変化」との関連がもつとも大きい

第19表 専門課程の学習生活のクロス表

項目 選択肢 %		専門学習		出席		自発性		影響		一般教養		語学		教養総合	
		1 12	3 29	1 33	4+5 14	1 12	4+5 20	1 15	3 10	1 3	3 46	1 5	3 65	3 7	6 35
学 年	3年	-1	+5	(+11)	-5	-5	+3	-2	0	-1	+7	+1	-1	+1	+5
	4年	-2	-5	(-12)	+2	+2	(-9)	+1	-2	-1	-3	-3	(+9)	-4	0
	延期1	(+9)	(-11)	-7	+3	(+17)	-3	+8	+1	+6	(-12)	-2	-3	+2	(-11)
	延期2	+3	(+11)	(-13)	(+26)	+8	(+15)	0	(+10)	+2	(-16)	(+10)	(-20)	(+13)	(-15)
教養在籍期間	1年半	+1	+1	+2	-1	0	-1	+1	0	0	0	+1	-1	+2	0
	2年	-4	+3	-5	(+10)	0	-4	+1	+2	-3	(-10)	-5	+3	-7	-3
	2年半~	-4	-5	(-21)	+6	0	+1	-7	+3	+1	(+10)	-5	(+11)	-3	(+9)
所 属	小学	-1	+5	0	+1	-3	+1	-3	+1	0	+5	-1	0	-2	+3
	中学	+6	-8	-3	+4	+8	0	+8	+2	+2	(-19)	+1	-5	+4	(-16)
	養護	-5	(-12)	+4	-7	+5	(-10)	+2	(-10)	-3	(+11)	+5	+8	+3	(+15)
	高体	0	-5	+2	(-14)	+6	-2	-3	+2	+3	+1	+1	(+17)	+5	(+12)
専 攻	教・心・障	+2	-6	+5	+1	-3	-5	-2	-5	+1	+4	+3	-2	+3	+6
	国・英・社	-6	+6	-3	+3	+3	+6	-7	+5	-3	+6	+1	-6	-1	-1
	理・技・数	-5	+1	-8	+7	0	+3	+8	+2	+4	(-14)	-2	+2	+1	(-13)
	家政	-7	(+14)	(+19)	(-14)	-2	-1	-5	0	-3	(+9)	-5	+6	-7	(+13)
適 性	あり	+7	(-13)	+1	-3	+5	-8	+5	-4	0	-6	+2	+2	+2	-3
	(なし 学部不適)	-6	(+29)	-9	(+10)	-6	(+24)	-7	(+18)	-3	+8	-3	-3	-5	+1
専門学習	かなり			(+17)	0	(+13)	(-9)	(+10)	(-10)	+5	(-21)	+3	-7	(+10)	(-16)
	なし			-8	(+9)	-3	+6	-3	+7	-2	+8	+3	0	+1	+5
自発性	あり(1/2)	+4	-5	+6	-8			(+14)	-8	+1	(-15)	0	-2	+1	(-9)
	なし(4/5)	-5	(+10)	(-13)	(+15)			(-12)	(+32)	-1	+8	-1	0	-3	0
(備考)特 長	肯定的大	美音体 延期1		家政、専門+ 3年		延期1、専門+		自発あり、専門+				延期2		延期2、専門+	
	否定的小	適あり、養護 延期1		家政、高体		養護、4年、 専門+		養護、専門+		専門一、中学 延期2、自発あり 理数、延期1		延期2		中学、専門+ 延期2、延期1 理数、自発あり	
	肯定的小			教養留2、延期2 自発なし、4年				自発なし							
	否定的大	不適、家政 延期2、自発なし		延期2、自発なし 教養留1、不適		不適、延期2		自発なし、不適 延期2		養護、教養留2		高体、教養留2 4年		養護、家政、高体 教養留2	

人 文 1 3 8 35	社 会 1 3 7 52	自 然 1 3 8 61	教 科 総 合 4+5 8+9 9 45	芸 術 ・ 体 育 1 3 18 35	教 育 1 3 5 37	心 理 1 3 5 35	教 職 総 合 2+3 5+6 8 46	職 職 観 変 化 1 3+4 53 24									
-3	+2	-1	+5	-1	0	-1	+5	-8	+5	-2	+2	0	+3	0	+4	-6	+2
+2	-1	-1	-8	+2	+4	-3	-6	(+12)	-4	-2	+1	0	-1	-1	+1	+8	(-9)
+1	-4	-1	-2	+4	(-11)	(+9)	+5	+7	(-13)	+1	(-11)	-2	-8	+2	(-14)	+7	+5
+2	-5	(+9)	-5	-3	-1	+7	-8	-8	0	(+15)	-2	0	0	(+12)	-6	-8	(+26)
0	-1	0	-2	0	-2	0	-1	-2	+2	-1	-1	0	-1	0	-1	0	-2
0	-7	-3	-8	+4	(+11)	+3	+3	(+15)	(-18)	-1	(-13)	+3	-7	0	-6	+3	+8
0	(+17)	-3	(+20)	-4	+7	-5	(+15)	+3	-6	+8	(+21)	-5	(+19)	+5	(+21)	-7	(+14)
-3	-1	0	-5	0	+1	-1	-2	-4	-2	0	-1	0	-1	+1	-1	-2	+1
+9	-4	+2	+6	+7	(-9)	(+10)	-1	+2	(-10)	0	-5	0	-4	0	-5	(+11)	0
-1	(+12)	-7	(+21)	-5	+6	-6	(+15)	(-10)	(+25)	-2	(+26)	+2	(+15)	-1	(+21)	(-15)	0
-8	(+12)	-1	-8	-8	(+16)	(-9)	+8	(+47)	(-29)	-5	(-13)	+1	+6	-2	+1	+6	0
-2	+3	-1	+4	-7	+5	-3	+7	-6	(+15)	+1	+4	+1	+3	+2	+7	(-11)	+3
+3	(-12)	-1	-5	-8	(+23)	-4	+2	(-15)	(+13)	0	+4	+1	+8	-2	+6	(-11)	(+11)
0	0	+1	+1	(+19)	(-40)	(+10)	(-16)	+2	-5	+3	(-11)	-1	(-14)	+5	(-15)	(+14)	(-9)
-3	(+13)	+3	(+10)	-3	+1	+1	(+12)	-4	-6	-5	(+13)	-5	(+13)	-8	(+14)	(+9)	-5
-1	+6	-2	-6	-3	(+16)	-4	+5	(+21)	(-25)	-5	-2	0	+2	-3	+1	+5	-1
-1	+1	+3	-4	+3	-4	+4	-2	+3	-3	0	-8	-1	-3	0	-5	(+12)	-4
+2	-3	-3	-4	-8	(+19)	-7	-1	-2	-1	-1	+3	+7	+3	+4	+2	(-15)	(+10)
+3	+1	+8	(-11)	+3	-5	(+14)	(-11)	-1	(-10)	+6	(-9)	+3	(-10)	+6	(-13)	(+16)	-7
-2	+1	-1	-2	-1	(+9)	-4	+3	-1	+3	0	-3	+2	-4	+3	-7	-2	+4
+4	-7	+3	(-13)	+2	-6	+6	(-12)	+2	-5	+3	(-16)	+3	(-10)	+6	(-12)	(+11)	-3
+1	+7	-2	(+11)	-4	+2	-4	(+11)	-3	0	-3	(+19)	-1	(+13)	-4	(+18)	(-24)	(+23)
	延期2	理数	中学、理数 延期1、専門+	美音体、高体 教養留1、4年	延期2		延期2					延期2				専門+、理数 中学、自発あり 適あり、家政	
国英社	自発あり、専門-	理数、延期1 中学	理数、自発あり 専門+	高体、美音体 教養留1、延期1 専門+、中学	自発あり、教養留1 高体、理数 延期1、専門+	理数、専門+ 自発あり	理数、延期1 専門+、自発あり	4年、理数									
			高体	国英社、養護				自発なし、不適 養護、教心 国英社									
小学、家政、高体 教心	教養留2、養護 自発なし、家政	国英社、不適 美音体、高体 教養留1、専門-	教養留2 養護、家政 自発なし	養護、教心 国英社	養護、教養留2 自発なし、家政	教養留2、養護 自発なし、家政	教養留2、養護 家政、自発なし	自発なし、延期2 教養留2、国英社 不適									

のは「講義の影響」である。この「講義の影響」は「学習の自発性」ときわめて強い関連が示されている。次に大きいのが「適性」である。また「自発性」と「適性」との関係もかなり大きい。また「適性」と「専門学習への集中度」とはこれもかなり高い値になっている。「適性」の自覚が「専門学習」へのとりくみを促すのであろう。この図から「自発性」と「適性」がきわめて重要な位置にあることが推定される。以上は「教育・教職観」の変化や「講義の影響」という意識・思想の側面における変化の問題を考えてみたのであるが、次に「学習」の知的側面について検討してみる。

### C) 学習成果に影響を与えていると思われる項目の検討

この表は専門課程の学習生活を「属性」と「適性」「専門学習」「自発性」との関係からクロスしたものである。表頭の項目では「好ましい」カテゴリーと「好ましくない」カテゴリーをとりあげ、その全体における%を示した。「専門学習」（問22）についていえば、1は「かなり深く勉強している」という回答で、それが全標本の12%あったことを示している。3は「とくに中心をおいていない」でこれが29%である。表側は、表頭の項目とクロスさせた項目である。各セルの数値はその%の全体からの差を示したものである。たとえば、学年3年の「専門学習」とのクロスについてみれば、「かなり深く……」が11%であるので、全体の12%より1%少ないことを<-1>で示し「とくに中心をおいていない」が34%であるので、これが全体の29%より5%多いことを<+5>で示している。従って各セルの左上の数字は「好ましい」もの、右下は「好ましくない」ものの数値（差）である。数値が全体の比率から大きくずれているもの（ここでは9%以上を目安とした）に○または□でかこった。○は好ましい傾向（左上の数字では+9以上、右下の数字では-9以下）が大きいものであり、□は好ましくない傾向が大きいものである。最下欄にこの○または□の項目（カテゴリー）を摘記してある。

まず「学年」では「延期生1」が全体的にかなり良い傾向を示していることがわかる。とくに多くの項目で「否定的な回答」が少ないことが目につく。つまり延期生は卒業を延ばしただけの学習をしているということなのであろう。「自発性」で「積極的な回答」がきわめて高いことも注目されよう。この調査の当初の仮説、「延期生は問題をかかえた学生であろう」というのは修正されなければならないようである。「延期生2（2年以上延期）」は「専門学習」「出席」「自発性」などでかなり否定的な傾向が強い。その点で上記の仮説は「延期生2」には妥当するようにみえるが、その学習成績の方はこれもかなり「良い」傾向を示している。

「教養留年生」では「留年1回」（備考欄では教養留1とした）は、正規の期間で進学した学生と大差はなく、むしろ学習面でよい場合が多い。しかし「留年2回以上（教養在籍2年半〜）」はかなり多くの項目で否定的なものの数が顕著に多い。先の仮説の関係で云うと、「延期生」のなかには色々なケースがあるが、「教養で留年をくりかえした者」はかなり問題があるとみてよさそうである。「教養留年2回以上」は「教養の成績の悪い者」が顕著に多い。おそらく、留年1回の者は学力的な問題で留年するケースが少ないのかも知れない。「留年1回」の学生は「芸術・体育」で



きわめて良い傾向を示しているから、サークル活動で留年するケースが多いのではないかと推測される。

「所属」では「小学」はきわめて平均的である。「中学」は概して良好である。「養護」は専門での学習生活では肯定的な部分が多く、否定的な部分が少なく、良い傾向が示されているのであるが、学習成績の項目では、ほとんどの項目で「否定的な回答」者が顕著に多くなっている。これはどのように解釈すべきか、今後の検討課題である。「高体」は「学習成績」の面では振わないが「芸術、体育」では「かなり自信」が圧倒的に多い（65%）そして「自信がない」者がこれまたきわめて少ない（6%）。「高体」の特徴がきわめて顕著に示されている。学生の所属課程はかなり学生の学習生活に大きな影響をもっていることがわかる。「高体」はやや極端であるが、課程のカリキュラムや学生組織のあり方が学習生活の方向づけをしているように思われる。

「専攻」も「課程」と同様にかなり特色が出ている。たとえば「国英社」は「自然科学」の成績が良くないと自認している者がきわめて多いし、他方「人文科学」では「自信なし」がかなり少なくなっている。「理技数」は全体として学業に自信をもっている者が多いが、とくに「自然科学」では「良い方」が19%多く、「悪い方」が40%少ないという、理数系らしい特徴を示している。「家政」は「出席」はきわめて良好であるが、全体として「学業」に自信のない者が多いようである。先の「養護課程」とやや似た傾向である。「美音体」も、先の「高体」と同じく「芸術・体育」でその特質を発揮している。「専攻」で特色がはっきりしないのは「教心障」である。

「適性」の有無は、これまで指摘したように「適していない」「学部自体がない」の部分が顕著な「問題状況」を示している。しかし学業面では、「出席」「自発性」などの否定的な傾向から予想されるほどには悪くないのである。これに対して「自発性」は学習生活態度においても学業の成績面においてもはつきり作用している。その作用のしかたは「否定的な回答」者の動きの方に大きく、「肯定的」な部分の変動はそれほど大きくない。「専門学習への集中」は、態度面でも、学業面でも、また肯定的な面にも否定的な面にも影響するところが大きいようである。

#### D) 「成績良好」群について

さきに、学生の自己評定をもとに「学習成績」が総体として「良好」と自認している者とそうでない者との2分して、分析をすすめてきたことを述べたが、この2群の比較について最後にまとめておく。「成績良好群」とはあくまでも学生の自己評定であるから、「成績に自信のある者」という方が正確であるが、この調査全体を検討した印象として、学生の自己評定はかなり妥当性をもっているように思われるので、あえて「成績良好群」としておく。さて、この区分は「教科専門」と「教職専門」の総合点をさらに総合したものであるから、この「良好」というものも各専門領域別にみればかなり分布に差があると思われるので、第20表に、そのクロス結果を示しておく。「外国語」「芸術・体育」は当然のことながら分離が低い、他ではかなりよく分離されている。「いくら自信」が6割以上含まれている。この「良好」群は全標本の44.7%である。

第20表 成績良好群の各カテゴリーにおける比率（%）

一般教養	1	100%	社 会	1	90%		2	49%
	2	65		2	72		3	32
	3	19		3	15	教 育	1	93
外国語	1	67	自 然	1	92		2	61
	2	51		2	65		3	11
	3	39		3	27	心 理	1	87
教養総合	3	77	教科総合	4	100		2	61
	4	67		5	100		3	10
	5	51		6	87	教職総合	2	100
	6	18		7	64		3	85
人 文	1	100		8	2		4	67
	2	60		9	0		5	26
	3	7	芸・体	1	54		6	3

標本全体の 44.7%

このような内容の「成績良好群」は、この調査の各項目においてどのような特徴を示すかをみたのが第21表である。この表の%は、それぞれのカテゴリー中の比率である。「男」についていえばその48%が「成績良好群」のなかに入っているということであり、この各アイテムとのクロスにおいて  $\chi^2$  検定結果が5%有意は◎、10%有意は○で、各アイテムの下に記した。また平均が45%であるのでその±15%で、とくに多い、とくに少ないカテゴリーの数値を○または□で囲った。このチェックはきわめて主観的なものである。この表の意味はとくに説明するまでもないであろう。こ

第21表 成績良好群の特徴

性別 男	48%	教養期間 1年半	47	親友 いた	47	教養出席 +2	49	専門学習かなり	53
女	42	2年	40	いかなかった	33	◎ +	47	いくらか	42
所属 小学	47	2年半~	24	大学 鹿大	39	0	38	しない	47
中学	49	職業 農水	43	選択 教育	43	-	53	学部 +2	54
養護	33	商工	45	地理	50	-2	19	学習自発性+	◎ 60
高体	29	教員	34	教師	44	◎ 教養影響かなり	80	0	37
専攻 ◎	40	公務	53	親	39	いくつか	52	-	32
教・心・障	39	勤労	41	希望せず	43	なし	34	※-2	50
国・社・英	63	他	65	他	38	教養 +2	67	学部影響かなり	◎ 60
理・数・技	33	高校 充実	64	教養 充実	61	◎ 学習自発性+	65	いくつか	44
家政	39	◎ 不満なし	50	◎ なんとなく	44	0	60	なし	29
美音体	39	なんともいえない	36	むなし	37	-	31	学部出席 +2	51
学年 3年	43	不満あり	39	◎ 充実 内容 学問	65	-2	26	+	47
4年	47	はやく出たい	32	◎ サークル	44	専攻適性 あり	48	0	36
延期1	46	あり	48	交友	51	◎ わからない	41	-	39
延期2	45	なし	39	社会活動	35	ない	54	-2	40
入学 現役	44	先生 いた	48	趣味	45	学部不適	7		
1浪	51	◎ いなかった	36	アルバイト	30				
2浪	39			他	46				

※ このセルは、標本数が著しく少ない。(N=6)

◎ とくに多いもの 60%以上 □ とくに少ないもの 30%以下

れまでの検討結果を数量的に確認するものであるが、標本数から云えば、95%信頼区間で比率45%の誤差は±4.5%、90%信頼区間で ±3.9%であるから（25%のときは、それぞれ ±3.9, ±3.3）大雑把に云えば10%程度のひらきがあって、はじめてその比率の差が「有意」なものといえるのであり、あまり数値の意味を厳密に考えてはならない。

## 8 要 約

- 1 学生の学習生活のタイプは、学習意欲と生活態度の積極・消極で区別される。（この2つがかなり重要な因子である）それはおよそ6つの類型になる。
- 2 高校生活の充実した学生は少ない。また充実を感じる面は、スポーツや芸術（音楽など）で研究的な面や社会的な面とのかかわりはきわめて少ない。
- 3 従って高校生活の充実は必ずしも直接的に大学における学習生活を積極化する要因にはなっていないようである。（生活にたいする積極性、明確な態度という面に働いていると思われる。）
- 4 学習生活のタイプの A, B 群のような「勉強型」には高校生活の条件とのかかわりがうすく、C, D, E 群を分けるうえで高校生活のありかたがかかわっている。
- 5 高校生活は、卒業延期生とりわけ教養留年経験者との関連が大きい。
- 6 学部での学習生活と関連が「有意」なものは「先生との関係」である。
- 7 高校生活の充実感は「熱中」体験の有無や「先生との関係」の有無と関連するが、この二つの関連のしかたは異なっている。
- 8 延期生・教養留年者は「問題的傾向」をもつ部分ともたない部分がある。一括してとらえることはできない。（延期・留年をくりかえしている部分はあきらかに「問題」がある。）
- 9 高校生活が充実していた者には「学業成績」に自信をもつ者が多い。
- 10 大学の選択理由は、専門課程での学習生活のありかたと有意に関連する。しかし「成績」との関連は有意でない。選択理由が消極的な者は「適性なし」「学部自体が適していない」者が多い。また学習の自発性のない者、講義から影響をうけない者が多い。（大学への期待の消極的な者にもこの傾向はみられる。）大学の学習生活にたいする「選択理由」の影響は大きい。
- 12 教養生活に充実感をもっている学生は少ない。また充実を感じている者もその充実の対象・内容はサークル活動や交友であって「学習」とのかかわりがきわめて弱い。
- 13 教養課程での生活は、講義への出席は比較的良いが、講義から影響をうけることは少なく、学習の自発性はきわめて弱い。
- 14 教養生活で充実感をもつ者は、相対的には「講義」にたいする関心は高い、出席もよく、自発性も大である。学部に進学してからの「自発性」も高いものが多い。
- 15 教養時代「むなしい」と感じていた学生にも学部に進学してから積極的な方向に変る者がかなりいる。

- 18 学生は学部に進学してから、学習生活における積極性を増大させている。しかしそれは学業との結びつきは弱く、「学習成果」に自信がもてない学生がかなり多い(約1/3強)。ほぼ4分の1の学生は大学教育のほぼ全領域において「自信がもてない」状況である。
- 19 学習成績の自己評定では上記のように「自信なし」がかなりいるが、ほぼ半数を超える学生は「教師になってがんばろう」という積極的な意欲を強めている。
- 20 専攻についての「適性」の意識は、課程によって異なり、「小学」と「養護」が低く、「わからない」とする者が多い。それはとくに「養護」に著しい。前報でも指摘した「課程」の性格・カリキュラム等の問題があるという推測はかなり確かであろう。
- 21 「養護」でとくに問題であるのは「専門学習」へのとりくみの意欲はかなりある(「とくに中心をおいていない」は17%でもつとも少ない)のに、「かなり深く勉強している」者は少なく、しかも「適性わからない」が60%もいることである。これはカリキュラム等で「専門」に集中することを妨げる条件やなかなか「専門」が意識できない条件があるのではないかと推測させる。
- 22 専攻でとくに問題と考えられるのは「家政」で、「適性なし」が24%と最も多く「専門学習」をしていない者が43%もいる。
- 23 「適性」と「専門学習」への努力は有意な関連があり、それはとくに「適性なし」「学部不適」において著しい差がみられる。
- 24 専門の教育の効果(影響)は、学習の自発性によって左右される。自発性は適性と関連している。
- 25 「出席」を例外として、専門における学習態度や学習成績は、学年とともに「延期1年」までは向上している。それは「否定的回答」の減少の面でとくに顕著である。
- 26 「教養留年1回」は、正規の進学者と大きな差はないが、「留年2回以上」は多くの面で「否定的回答」がきわめて大きくなっている。
- 27 課程によって学習生活の態度や学習成績に特徴がある。「小学」は平均的、「中学」は態度において「積極的」がやや多く「一般教養」で「自信なし」が少なく「教科専門」で「自信あり」が多い。「教職観」も「積極的変化」が多い。「養護」は学習態度において「否定的」な者が少なく、真面目さを印象づけるものであるが、「教養総合」でも「教科総合」でも「教職総合」でも「自信なし」が顕著に多い。「高体」は態度は平均的であるが「出席不良」は0である。「芸術・体育」は圧倒的に良いが「語学」「人文」「自然」などで「自信なし」がかなり多い。
- 28 専攻では学習態度は全体的には大差がないが、「美音体」に「専門学習」への集中が顕著であること「家政」は「出席」状況はきわめて良いが「専門学習」への集中がきわめて弱いことなどが特徴的である。「学習成績」では、それぞれの専攻に関係のある領域で特徴的な結果が示されている。
- 29 「適性」は「なし、学部不適」に「否定的回答」が顕著である。
- 30 「専門学習」は「かなり深く」の方に「肯定的回答」が多く「否定的回答」が少ないというよう

に積極的な影響がみられる。

31 「自発性」では「あり」「なし」の両者とも「否定的回答」の多寡という形で影響を示している。

注

- 1) 退学者の統計は、鹿児島大学保健管理センターの「保健管理センター年報」第1号(昭和54年度)～第4号(昭和57年度)の退学者統計による。
- 2) このプロット図における属性に関するカテゴリーの位置には注意を払う必要がある。それはサンプリングのかたよりが影響していると思われるからである。「延期生」「教養留年」が第I象限の右上方に位置しているのは、恐らく、男子が多いからであろう。しかしこれは母集団(延期生, 教養留年の)自体において男子の比率が圧倒的に大きいのであるから、とくに問題とするにはあたらない。しかし、中学, 実技系, 高体(特別体育)では延期生の占める割合は、母集団における割合よりきわめて大きいから、その影響は無視できない。(標本における延期生/4年以下と母集団におけるそれは、中学: 標本=23/43=0.56 母集団=50/178=0.28 高体: 標本=7/10=0.7 母集団=13/59=0.22)
- 3) 成績良好・不振群は次のようにして区分された。教科専門の成績と教職専門の成績とのクロスを求めると次表のようになる。これをほぼ半分に分けなる分割線を求めて、成績上位の群と下位の群に区分した。成績上位群は教科専門の平均が2.03 教職専門の平均が1.98, 下位群は2.71と2.57である。(成績の評定基準は3段階で、かなり自信…1 いくらか自信…2 とても自信がもてない…3 である。)

	教 職 専 門					計	
	2	3	4	5	6		
3	0	0	0	0	0	0	欠損データ9ヶは 次のように配分された
4	0	3	3	0	1	7	
5	0	3	13	2	1	19	→ 上位群 127+8
6	3	5	34	13	8	63	→ 下位群 166+1
7	1	6	39	15	11	72	
8	0	0	25	23	19	67	
9	0	3	19	8	35	65	
	4	20	133	61	75	293	

(1983. 10. 15)